

Ⅶ まとめ

ま と め

1994・1995年度の調査は、本学の埋蔵文化財調査室が始動したばかりの頃に実施した調査であるため、体制的にも時間的にも余裕のない状況下で実施したものがほとんどである。よって、調査の記録や開示法に若干の不備を抱えている部分もないとは言えない。ただし、黒髪町遺跡群や本庄遺跡などのように本学を中心とする遺跡群における調査成果は、これまで明らかでなかった学術的な意義を見出す大きな端緒となった。

実際、黒髪町遺跡群における黒髪北・南地区の発掘調査の成果（9407・9412・9501・9512調査地点など）は、それまで断片的な情報しか存在しなかった古代の駅家に関連する施設や周辺の集落の状況を知る上できわめて有益な情報源となった。「馬」銘墨書や「國」銘印、各種墨書・ヘラ書き土器、布目瓦、土馬、越州窯青磁など、出土遺物にみる一般集落とは異なる官衙もしくはそれに相応する施設に関連する様相は、蚕養駅関連の施設が付近一帯に存在することを暗示するものであった。これを裏づけるように、最近の調査によって大学構内の古代官道の通過地点もほぼ明らかになってきており、今後は中心的な施設の追求および特定作業を残すのみである。

また、本庄遺跡における発掘調査（9511調査地点）では、古代を中心とした遺跡群がより南へ広がること、集落の存続時期が7世紀～9世紀であり、周辺の大江遺跡群などと同じように官衙や関連施設の移転とともに集落が衰退していく状況が明らかになったことは、古代詫麻郡の政治施設の配置やそれに付随した集落変遷を考える上で興味深い事実である。遺跡の全容についてはまだ不明な点が多いが、各時期の排水溝・用水溝などが多く存在し、水の管理が大変な地域であったようである。ただし、このような低い土地であっても堅穴住居や倉庫などを構える集落があったことは事実であり、今後は遺跡の広がりや地点ごとの状況の違いを細かく捉えていく必要があるだろう。

大江遺跡群内で行われた発掘調査（9408・9413調査地点）では、小規模な調査ではあったが、古代官道より東一坪の境の道路が検出されたこと、大江遺跡群の既往の調査で明らかにされていた集落構造に関連する資料を追加・補足したという点で大きな意義があったものと思われる。

これら熊本平野北東部の洪積世台地の裾部には、本報に収録したとおり、各調査地点から出土した縄文時代後期～晩期前半期の資料が示すように、縄文時代の集落址も点々と残されている。この白川中流域一帯の周辺地域には縄文時代早期の宇留毛神社遺跡、後期の渡鹿貝塚、北久根山遺跡など、熊本平野でも重要な遺跡が点在しており、本学内の資料も断片的ではあるが、これらとの関連の中で整理されれば、きわめて貴重な資料となり得るものと思われる。本地域は古代遺跡の密集地域であり、研究の主体も自ずからそちらに重点が置かれがちではあるが、今後は縄文時代集落の遺跡立地の研究も重要な課題となるであろう。今回は明確な遺構を捉えることはできなかったが、今後はこれらの精査に努めたい。

縄文時代といえば、今回本書では収録できなかったが、1995年度に合津地区で実施した理学部附属研究実験棟改築に伴う発掘調査（9509調査地点）の成果について最後に触れておきたい。今回の調査では、これまで後期の貝塚と推定されてきた前島貝塚の貝層の延長部にあたる部分を調査し、併せて丘陵直下にある海岸部の縄文時代早期～前期の遺物を含む遺物採集地点の年代測定・貝類の分析などを実施した。結果として、（1）前島貝塚は存在せず、貝層は近代以降の施肥としてもたらされた貝類・貝藻類付着微小貝とその下部にある縄文時代早期の包含層の遺物が開墾によって交じり合った結果形成されたものであること、（2）海岸部の遺跡は縄文時代前期の年代（歴年代：5035B.C.、

5290B.C.) をもち、当時の付近一帯はハイガイやシオヤガイなどが棲息する潮間帯の汽水域に近い環境、つまり岩礁と砂泥をもつ現在に似た波打ち際の景観であること、などが明らかになった。(1)の結果に関しては、貝類の種構成や齢構成および出土貝の年代(歴年代:1680A.D.)から導き出した。しかし、かつて実験所の宿舎建設の際に建築業者が石斧7本を発見していることがその後の山口隆男助教授からの聞き取りによって明らかになっており、今回発見した礫群を伴う縄文時代早期の遺物包含層とともに、本地区に縄文時代の遺物包含層が良好に残っていることは確かである。

本学は以上のように多様な時期や性格の遺跡を包蔵し、しかもそれぞれが地域の埋蔵文化財包蔵地の中において重要な地点に位置するなど、本学の埋蔵文化財に対する責務は決して軽易なものではない。今回報告にあたって、あらためて本学の埋蔵文化財に携わる者の一人としてその責任の重大さを痛感した次第である。遺跡情報を高度かつ合理的に回収すべく、近年では写真測量システムやウォーターセパレーション法の導入など、調査法の改良に努めているが、スタッフの充実を含め、より効果的な調査法の開発、コストの低い整理法の採用など、さらなる改良を模索すべき段階にきていることを感じる。今後の課題としてつねに念頭におきながら実務に取り組んでいきたい。

【参考・引用文献】

- 網田龍生 1994「奈良時代肥後の土器」『J』197-254頁、龍田考古会。
- 網田達生 1994「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究』X、93-117頁、日本中世土器研究会。
- 網田達生 1997「肥後における竪穴住居の終焉」『肥後考古』10、51-69頁、肥後考古学会。
- 大江青葉遺跡調査団 1976『大江青葉遺跡』。
- 小畑弘己 2001「前島貝塚と海岸遺跡-熊本大学理学部附属臨海実験所内の調査より-」『CALANUS』13、28-46頁、熊本大学理学部附属臨海実験所。
- 木下 良 1975「肥後国府の変遷について」『古代文化』9-27、1-19頁、古代学協会。
- 木下 良 1995「肥後の古代交通路」『火の国の原像』、第10回熊本地名シンポジウム記録、13-35頁。
- 熊本市教育委員会 1980『熊本市中央北地区文化財調査報告書』。
- 熊本市教育委員会 1982『大江東原遺跡』。
- 熊本市教育委員会 1989『大江遺跡群Ⅰ』。
- 熊本市教育委員会 1993『大江遺跡群Ⅱ』。
- 熊本市教育委員会 2002『大江遺跡群Ⅳ』。
- 熊本市新熊本市史編纂室 1996『新熊本市史 史料編 第一巻考古資料』。
- 熊本市文化財調査会 1971『昭和44年度熊本市文化財調査報告書Ⅱ 北部地区』。
- 熊本県教育委員会 1968『熊本県文化財調査報告』第9集。
- 熊本県教育委員会 1977『熊本県の条里』、熊本県文化財調査報告第25集。
- 熊本大学埋蔵文化財調査室 1994『熊本大学埋蔵文化財調査室年報』第1集。
- 熊本大学埋蔵文化財調査室 1995『熊本大学埋蔵文化財調査室年報』第2集。
- 財団法人多士会館 1986『黒髪町遺跡・多士開館敷地発掘調査報告』。
- 田村 実 1995『熊本の土地の生い立ち-熊本市及びその周辺の地質-』、熊本地学会。
- 鶴嶋俊彦 1997「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』7、39-66頁、古代交通研究会。
- 郵政省九州郵政局 1986『大江東原遺跡』。